

一編集後記一

「自分の負けを認めるだけで、こんなに見晴らしがよくなるなんて…。ほんとに意外だった。これに気付くのに四、五年かかった。

前の職場では吸着の物理化学、しかも理論的側面を研究していた。大した仕事もしてないくせに、自分の目指すものに対して、妙なプライドだけはたっぷりあった(笑)。

今、フィールド科学一点張りの職場にいる。もう何年ここで働いただろう？。とにかく精神的にきつかった。酸性雨、富栄養化、地球温暖化。どれもとても大切な研究テーマなのは分かってる。やる気もある。しかし心の底からは愛せない自分がいつもいた。

理由はとても簡単に「自分の専門的知識が全く要求されない」とか「自分の土俵で勝負できない」とか。ほんとうに情けない話だ(笑)。それから、専門外の知識の無さを痛感する時(フィールド科学だとこんな事ばかりだ)、ちょっとばかり打ちのめされる(笑)。微生物、植物、生化学…。不勉強を後悔しても、もう遅い。こんな時、心が狭くて弱い奴は、過去のプライドだけを心の支えに心を閉ざす。それが30代後半の自分だった。

転職のきっかけは3年前にやってきた。断れない仕事を請け負った。誰もが見捨てたデータを解析して、で、投稿論文を仕上げるという馬鹿げた仕事。「たった年4回の測定で何が分かる?」「何で俺が尻拭いせないかんとや?」「勘弁してよ!」。毎日愚痴った。しかし一年後、データの面白さの一端が見え、発見の予感がした。

ところが、共同研究者にその予感を話して、彼の専門知識を借りようと思ったら鼻で笑われた。「たった年4回の測定で何が分かる?」と。裏切られた気持ちで一杯

になった。で、何年ぶりだろう?、久しぶりに心の底から血がたぎった。もう他人には頼らん!。専門外の事も一から勉強し(これが意外と面白かった)、さらに一年かけて試行錯誤している最中、ある時突然、想像もしていなかったストーリーがデータの中から浮かび上がってきた。

ほんとに突然だった。データの訴えるものを心で感じられた瞬間だった。実験室内で仕事を進める限り絶対に見えない世界を、フィールドからもってきたデータだけが教えてくれる。不備の多いデータでも、必ずメッセージがある。思い切り集中して、データをあの手この手でいじくり回し、声をかけているうちに、必ず向こうから、思いがけぬ物語が一気に広がってくる一瞬がある(いつもじゃないけどね(笑))。それが分かった途端、知らない事が多すぎる事がさほど苦にならなくなった。謎が多いから楽しめるんだと…当たり前のことを再発見した。

「専門性」というプライドを捨てると「理解したい」という欲求だけが残る。自分の器の小ささを素直に認める事が、フィールド科学で謎解きを楽しむための、唯一の切符だった。嬉しい誤算もあった。たまにだけけど、物理化学の知識が役に立つ事がある。「こんな事もあるんだな…」と、懐かしい仲間に会ったような、そんな嬉しい瞬間がある。

やっと長いトンネルを抜けだせそうだと、先が見えてきた途端、やるべき事が増え、現実逃避の魚釣りにも行かなくなり、気付かぬうちに、昨日40歳になっていた。「四十にして惑わず」というのは、ほんとなのかもしれない。これも新しい発見。「しあわせはいつもじぶんのところがきめる」。相田みつをの言っている事も、ほんの少し分かってきた。(編集委員 中原 治)

土壌物理学会

事務局構成

会 長	長谷川周一 (北海道大学)
副 会 長	谷山 一郎 ((独) 農業環境技術研究所)
庶務幹事 (庶務)	成岡 市 (三重大学)
〃 (会長付き)	倉持 寛太 (北海道大学)
会計幹事	柏木 淳一 (北海道大学)
編集幹事	岩田 幸良 ((独) 農業・生物系特定産業技術研究機構)
会計監査	矢沢 正士 (北海道大学)
〃	渡辺 治郎 ((独) 農業・生物系特定産業技術研究機構)
編集委員会 委 員 長	石渡 輝夫 ((独) 北海道開発土木研究所)
委 員	柏木 淳一 (北海道大学)
	加藤 邦彦 ((独) 農業・生物系特定産業技術研究機構)
	北川 巖 (北海道立中央農業試験場)
	三枝 俊哉 (北海道立根釧農業試験場)
	取出 伸夫 (三重大学)
	永田 修 ((独) 農業・生物系特定産業技術研究機構)
	中辻 敏朗 (北海道立中央農業試験場)
	中原 治 (北海道大学)
	橋本 均 (北海道立中央農業試験場)
	横濱 充宏 ((独) 北海道開発土木研究所)